

A 病院における認知症ケアと身体拘束削減に向けた取り組み

法人名 医療法人篠原湘南クリニック
病院名 クローバーホスピタル
職種・所属 医療療養・特殊疾患病棟師長認知症ケア委員
発表者氏名 佐藤朋子
協力者氏名 長谷川よし子 古川幸代

I. 目的

A病院は、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟、医療療養病棟、特殊疾患病棟の計170床を有する在宅療養支援病院である。筆者はH29年認知症ケアプロジェクト立ち上げから現在まで認知症ケア委員として活動し、全職員の認知症に対する知識の修得や適切な認知症ケアの発信に努めてきた。取り組みの中で直面した病棟における認知症ケア・身体拘束の現状や今後の課題について示唆を得たので報告する。

II. 方法

R2年10月A病院の職員、医師13名、看護師/介護職125名、セラピスト61名、その他の部門84名を対象に高齢化社会の現状・認知症ケア・身体拘束削減をテーマとした院内研修を実施し、研修後アンケート調査を実施した。また、受講した院外研修を参考にケアの理論の研修を一病棟の看護師/介護職へ実施し、比較的取り組みやすい技法を1つ決め、同病棟において試験的に導入する取り組みを2週間実施し、実施後アンケート調査を行った。

III. 結果

研修後アンケートにおいて「認知症患者への関わり方・身体拘束削減に向けた考え方が理解できた」「家族の理解・医師の協力が必要」「病棟スタッフの人員不足のため、身体拘束をせざるを得ない場合もあり多職種の協力が必要」という意見が複数みられた。また、ケアの技法を試験的に導入した病棟のアンケートにおいては、「患者が穏やかになりケアに協力が得られ、ケアがしやすくなった」という意見がみられた。

IV. 考察

院内研修により適切な認知症ケア・身体拘束削減の必要性について職員に意識づけをすることができたが、マンパワー不足の病棟の現状や、患者の転倒リスク等の理由から身体拘束につながりBPSDを助長させる悪循環が生じていることが考えられた。2週間試験的に実施したケアについては、段階的に導入することによりスタッフに大きな負担感なく成果を得ることができた。今後の課題として、段階的なケアの導入、多職種の協力、適切なケアにより患者・スタッフ双方にとって良い効果が生まれるという成功体験の積み重ね、病院全体をあげての取り組みの必要性が示唆された。

参考文献：1)小山尚美：中規模病院の一般病棟で認知症高齢者のケアを行う看護師の困難 20132)内山光太郎、望月紀子：認知症高齢者の身体拘束に関する看護職・介護職の認識 2015